エール
—薬剤師の幸せな人生を願って—

鍋島 俊隆
NPO法人医薬品適正使用推進機構理事長／藤田医科大学客員教授／名古屋大学名誉教授／Al.I. Cuza大学（ルーマニア）名誉教授

第1回

薬物治療の質と安全性の確保

『ターンアップ』は、薬剤師にエールを送る目的で発刊されたと聞く。私も薬剤師に期待するところが大である。そこで、この誌面をお借りして皆さんが「薬剤師になって良かった」と思える、充実した幸せな人生をすごすために何をすれば良いかをお伝えしたい。

アンサング——称賛されない——薬剤師が陰から表に出て、幸せになるための近道は何か。ひとつには、「薬物治療の質と安全性を確保し、患者のQOLを向上させる」ことである。そして、地域医療に薬剤師がどれだけ貢献しているかについて、患者や医療チームの仲間に認めてもらえるだけのエビデンスを出すのだ。ここで腰が引けてしまう読者もいるだろう。しかし、薬剤師としてできること、興味あることを「なせば成る。なさねば成らぬ何事も」の楽観主義で実行すれば、必ずかなうはずだ。Yes, you can！

❖

具体的に「薬物治療の質と安全性を確保し、患者のQOLを向上させる」術について考えていこう。

そもそも医薬品は、医師が的確な診断の末に最適な薬剤を処方し、薬剤師が正確に調剤を行ってわかりやすい服薬指導をしても、患者が理解したうえで用法、用量を守らなければ、効果が出ないどころか、副作用が起きるおそれもある。

薬効や副作用を最終的に評価できるのは患者自身だ。ゆえに、患者が、これらを医師や薬剤師にフィードバックできれば、医薬品の適正使用につながる（【資料】）。つまり、患者のQOLを医薬品によって向上させるポイントのひとつは、患者教育と言えよう。

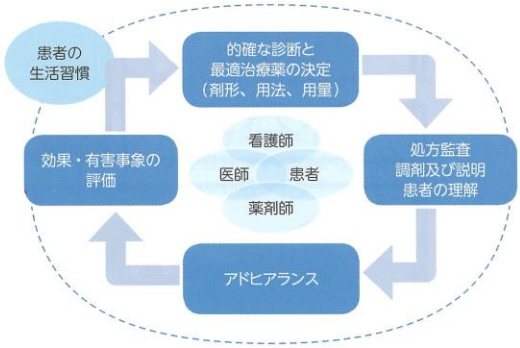
❖

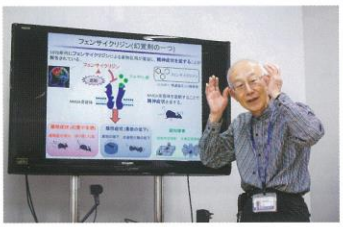
私はこれまで市民を対象に、医薬品と安全に安心してつき合うための教育にたずさわってきた。まず、患者や介護者が理解できる言葉を用いた服薬指導を通じて、彼らが病識、薬識を身につけ、薬効や副作用についてフィードバックできるようになることをめざし、1990年に舞鶴市民病院で[1、2]、2000年に名古屋大学病院[3、4]で薬剤師外来を開設するのをバックアップした。さらに、1991年からは病棟への薬剤師の派遣を開始[5、6]した。また、薬と安全に安心してつき合うための教育は小学生から成人市民までに必要と考え、NPO法人医薬品適正使用推進機構（http://www.j-do.org）を2006年に立ち上げ、活動している[7、8]。中でも、最後にご紹介したNPO法人の活動は、小学校をまわって話をしたり、市民公開講座で講義をしたりと地域の薬剤師の方々でも実行しやすいものと考える。実際、薬局薬剤師とコラボして行った活動の例も多い。ぜひ、身近なところから患者教育に着手してみてほしい。

❖

次号以降も、「薬物治療の質と安全性を確保し、患者のQOLを向上させる」ために、皆さんに何ができるかをお伝えしていきたい。

【資料】医薬品の適正使用




医薬品適正使用推進機構のイベントで講演する筆者

Profile
なべしま・としたか
1973年大阪大学大学院薬学研究科博士課程単位取得退学。名古屋大学大学院医学系研究科教授、同大学医学部附属病院薬剤部部長（併任）、名城大学大学院薬学研究科教授、名城大学比較認知科学研究所所長（併任）などを経て現職

〈参考文献〉[1]丸山豊和ら：Improvement in drug compliance by medical consultation at a pharmacist outpatients' clinic（part 1）. J. Appl. Ther. Res., 4, 18-24（2003）／[2]丸山豊和ら：前記と同じタイトル（part 2）. J. Appl. Ther. Res., 4, 25-33（2003）／[3]深瀬文昭ら：外来抗凝固療法への薬剤師の参加：ワーファリン教室. 医療薬学, 29, 575-580（2003）／[4]倉田洋子ら：外来喘息教室における薬剤師の役割とその効果について. 医療薬学, 35, 145-151（2009）／[5]中尾誠ら：高齢患者における経腸栄養施行中の下痢に対する可溶性食物繊維の有用性. 静脈経腸栄養, 18, 53-57（2003）／[6]伊藤由紀ら：病棟薬剤師の介入による処方薬剤数、薬剤費および副作用発現頻度の減少. 医療薬学, 31, 113-120（2005）／[7]小谷悠ら：児童向けくすり教育への薬学生の参画. 薬学雑誌, 130, 857-866（2010）／[8]櫛田真由ら：薬学生主導による児童向け出前くすり実験授業の有用性. 医療薬学, 39, 10-17（2013）

©㈱ファーマシィ,『TURNUP No.49 』2020.11.11発行より抜粋